

# 今村知子<sup>1</sup>・齊藤安行<sup>2</sup>：漂着したハイイロミズナギドリの体内から確認されたクリイロカメガイ

Tomoko IMAMURA<sup>1</sup> and Yasuyuki SAITO<sup>2</sup> : Identification of thecosmatous pteropod *Cavolinia uncinata* inside the body of stranded sooty shearwater *Puffinus griseus*

ハイイロミズナギドリ *Puffinus griseus* は、ニュージーランド周辺、オーストラリア南東部や南アメリカ南部の島嶼など南半球の広域で11～4月に繁殖し、その後北太平洋と北大西洋の北緯60°付近まで渡るミズナギドリ目ミズナギドリ科の海鳥である (del Hoyo et al. 1992; 千嶋 2015). 日本近海では4月頃から北上する個体が見られ、10月頃までは本州中部から北海道太平洋上に多く、冬にも少数が観察されている (千嶋 2015; 箕輪 2020). 繁殖地ではオキアミ類やハダカイワシ科魚類を中心に採食しており、越冬地では主に小型の魚類、イカ類、甲殻類を食べるほかウミアメンボやカツオノカムリなどのクラゲ類も食べることが知られているが (del Hoyo et al. 1992; Shiomi and Ogi 1992; 千嶋 2015), 浮遊性の貝類であるクリイロカメガイ *Cavolinia uncinata* が採食されたという記録はない. 筆者らは、漂着したハイイロミズナギドリ1個体の体内からクリイロカメガイを確認することができたので、ここに報告する.

## 漂着記録

ハイイロミズナギドリが漂着していたのは、2021年6月22日茨城県神栖市波崎地先の海岸である.

この個体は、胸部が大きく破れていて、全身の皮はほぼ残っていたが胸筋と内臓はほとんどなく白骨化しており、ウジが認められ、腐敗臭がしていた (図1-a). 全身が黒褐色で嘴と脚は黒色、下雨覆が白色で各羽の羽軸が黒褐色、露出嘴峰長は38.3mmであったことから (図1-a・b), 本個体をハイイロミズナギドリと同定した (千嶋 2015; 箕輪 2020). また、本個体は換羽しておらず、全身がすべて新羽であった. その場で皮を剥いて内部を観察したところ (図1-b), 胸骨と肋骨、脊椎で囲まれた体内およびこれら骨と皮の間に小さな黒褐色の貝が多数認められた (図1-c). 体内からそれらをできる限り集め (図1-d), 鳥体も回収した.

鳥体が落ちていた周辺を念入りに探したが、ツメタガイ *Glossaulax didyma* やチョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii* などが散見されたものの、体内にあった貝と同様の種は確認できなかった.

また、当日歩いた砂浜海岸約1kmの範囲内で確認できた漂着鳥類は、オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* 5体、ハイイロミズナギドリ20体、ハシボソミズナギドリ *P. tenuirostris* 4体、ニワトリ *Gallus gallus var. domestics* 1体であった. これらのうち分解途中あるいは白骨化しているものの皮が付いていたため内部を確認できたのはオオミズナギドリ4体、ハイイロミズナギドリ9体、ハシボソミズナギドリ1体で、このうち体内に貝を確認できたのは本報告のハイイロミズナギドリ1体のみであった.

ハイイロミズナギドリの体内から回収した貝は、殻の色と腹殻が膨れて丸いこと、背殻には明瞭な縦皺があり背側に大きく反り返っていること、ひさしが殻口を覆うほど曲がっていること、左右の側翼が張り出していることなどの形態的特徴から、クリイロカメガイであると同定した (奥谷 2000, 2017, 図2-a). 翼足目カメガイ科のクリイロカメガイは、日本近海の暖流水域を含む全世界の温・熱帯水域に分布し、翼状に発達した外套膜葉と長い付属糸を持ち浮遊生活を送り、餌となる懸濁物を集めるために大きな粘液トラップを作ることが知られているが (奥谷 2000, 2017), 今回回収されたクリイロカメガイはすべて中身がなく、貝殻であった. 貝殻は回収時に壊れてしまったものも含め82個確認できたが、すでに壊れていて数えられない殻もあった. 繊維のからんだイカ類の上顎も1個含まれていた (図2-b).

体内には乾燥した筋胃が残っており、切り開いたとこ

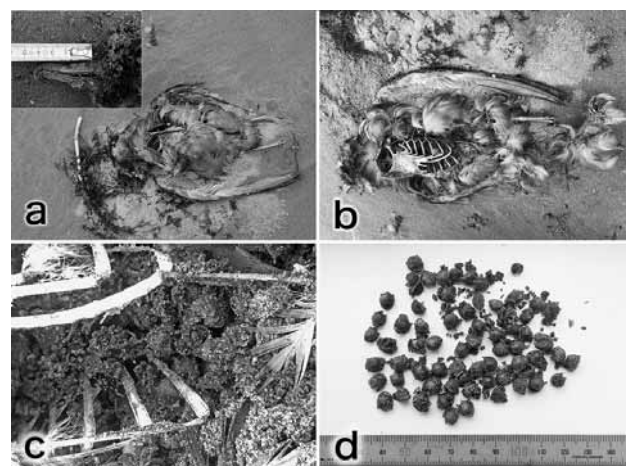


図1 漂着したハイイロミズナギドリと体内から確認されたクリイロカメガイ

- a 漂着時のハイイロミズナギドリ  
b・c 体内に確認されたクリイロカメガイ  
d 回収されたクリイロカメガイ

ろ中には何も入っていなかった。

### 考察

回収したハイイロミズナギドリは全身新羽であったことから、この冬南半球で生まれ、越冬のために北上する途中の若い個体であると推定された(千嶋 2015)。筋胃の中身がなかったことから、北上途中に海上でクリイロカメガイを採食したものの採食後筋胃に入る前に本個体は死亡したと推測された。胸に破れがあったことから、生きて漂着した際カラスなどに襲われて死亡したか死亡して漂着した後に胸筋を食べられ、その後腐乱およびウジ等によって分解され体内に貝殻が残ったと考えられる。

ハイイロミズナギドリは主に小型の魚類、イカ類、甲殻類を採食し、ウミアメンボやカツオノカンムリなどのクラゲ類も食べる(del Hoyo et al. 1992; Shiomi and Ogi 1992; 千嶋 2015)。しかし浮遊性の貝類を採食していたという事例は報告されておらず、今回が初の採食事例である。同日確認できた他の漂着鳥類の体内からは確認されなかったことから、ハイイロミズナギドリの体内から浮遊性の貝類であるクリイロカメガイが確認されたことは稀なことであり、衰弱した本個体が海上で浮遊していたクリイロカメガイを偶発的に採食したものと推測された。

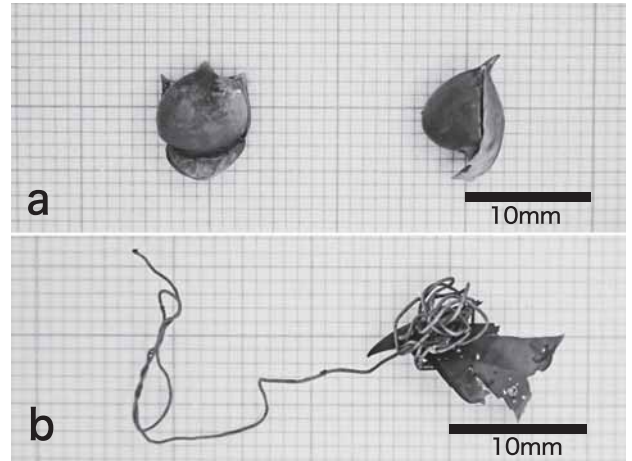


図2 ハイイロミズナギドリの体内から回収されたクリイロカメガイとイカ類の上顎  
a クリイロカメガイ  
b 繊維がからまったイカ類の上顎

謝辞：文献閲覧でお世話になった山階鳥類研究所コレクションマネージャーの鶴見みや古氏、有益な指摘をしていただいた2名の査読者および投稿の際大変お世話になった北海道教育大学札幌校漂着物学会誌編集委員長の鈴木明彦氏に感謝する。

### 引用文献

- 千嶋 淳. 2015. 北海道の海鳥. 55pp., NPO 法人日本野鳥の会十勝支部, 帯広.
- del Hoyo, J., Elliott, A. and Sargatel, J. (eds.) 1992. Handbook of the Birds of the World. 1. 696 pp., Lynx Edicions. Barcelona.
- 箕輪義隆. 2020. 新海鳥ハンドブック. 104pp., 文一総合出版, 東京.
- 奥谷喬司. 2000. 日本近海産貝類図鑑. 1173pp., 東海大学出版会, 東京.
- 奥谷喬司. 2017. わが国近海に見られる浮遊性巻貝類-V 有殻翼足類・カメガイ亜科. うみうし通信 (92): 4-5. ([http://www.rimi.or.jp/wp-content/uploads/2017/08/92-02\\_Okutani\\_V\\_rev.pdf](http://www.rimi.or.jp/wp-content/uploads/2017/08/92-02_Okutani_V_rev.pdf)) (2021年8月17日閲覧)
- Shiomi, K. and Ogi, H. 1992. Feeding Ecology and Body Size Dependence on Diet of the Sooty Shearwater, *Puffinus griseus*, in the North Pacific. Proc. NIPR Symp. Polar Biol., 5: 105-113.

(Received Aug. 31, 2021; accepted Oct. 5, 2021)

<sup>1</sup> 〒302-0034 茨城県取手市戸頭1634-2-609

<sup>1</sup> 1634-2-609 Togashira, Toride City, Ibaraki Prefecture 302-0034, Japan

<sup>2</sup> 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山234-3 我孫子市鳥の博物館

<sup>2</sup> Abiko City Museum of Birds, 234-3 Konoyama, Abiko City, Chiba Prefecture 270-1145, Japan